

芸術教科における統合実践の研究

池上 敏、中野 幸郎*、高下 正明*

A Study for the practical teaching that joined and mixed artistic subject in junior high school in Japan

Satoshi IKEGAMI, Sachiro NAKANO*, Masaaki TAKASHITA*

はじめに

- 1 芸術教科における合科授業の可能性について
- 2 学習指導案
- 3 実践を通して(反省と考察 および今後の課題)

終わりに

はじめに

近年、合科授業の可能性が学校現場で改めて認識されてきたように思われる。このきっかけの一つに、平成元年の文部省指導要領小学校用において低学年の理科と社会科が廃止になり、交代に「生活科」が登場したことを挙げても良いだろう。また、スタートが何時になるのか未だはっきりとした見通しは立っていないようであるが、国語、音楽、美術などを統合した表現科の構想も、実験の段階から学校現場への実施時期の検討へ移りつつある、との観測が教育関係者の間に流れている。このような一連の動きは、細分化によって学習の効率化を計った結果、知識の吸収や総合的な思考能力や判断力、表現力などにおいて決して好ましい結果のみが表れている訳ではない、相対的にはもはやマイナス面の方が大きくなってきた、という文部行政担当者の多くの判断によるものであろう。

合科授業がこのような背景によってクローズアップされ、実施されたにしても、その実践例の多くは導入的な段階に留まっていたのではないか？ すなわち、二つ以上の教科に共通する要素を見つけ出し、それを複数の教科で別々に取り上げるよりは共同の時間で一度に済ませてしまおう、というものが多かったように感じられる。そこまで極端ではないにしても、社会科の地理領域と音楽科の民族音楽との単元をミックスして教え、その後社会科は世界の様々な国々の学習へ、音楽は非西洋文化圏の音楽の仕組みやあり方の学習へ、と発展させて行く、というようなものである。これらの教科統合的な授業はそれなりに大きな意味があり、生徒達も一つ一つを細分化して習うよりも総合的な視点が得られて良い、という感想を持つ場合も多いだろう。が、このような発想の授業で終始している限りは合科授業は何か具体的な、目に見える成果を産むことが可能だろうか？ 何ものも産まない、

*山口大学教育学部附属山口中学校

*Yamaguchi junior high school attached Educational Faculty, Yamaguchi University

いや産むことが出来ない、と答えざるを得ないだろう。確かに、教育とは目の前の具体的ではっきりした成果のみが総てではない。極めて長い時間が経過した後に表示されて来るもの、はっきりと意識の表層には浮かび出は来ないが、常に心の片隅にあってその人の生き方を規制している観念などはやはり広い意味での教育の結果、与えられるなり獲得したものだだろう。教育に現実的な効果などを求めることがそもそも間違いだ、という意見もあろうから、一概に断定的な判断をしてはならないが、現在の芸術系の教科が置かれている状況を考えると、何らかの具体的な成果をあげることは極めて重要に思える。特に学校の週五日制実施によって授業時間数の総枠が減少する結果、学校教育から社会教育の場への移行が取り沙汰される芸術教科の場合、このような二つ以上の教科にまたがった統合的な実践が各々の教科が単独で授業を行っている限り決して産み出すことが出来ない成果を提示することが出来る可能性があるだろうし、新たな授業展開を模索する意味でもますます重要であろう。

1 芸術教科における合科授業の可能性について

(1) 音楽表現（聴覚表現）と視覚表現との関わりについて

音楽と美術とは同じ「表現について扱う教科」として近い間柄でありながら、それぞれに全く異なった表現媒体（メディア）と表現技術を題材として扱ってきたために、学習の方法論（または教科）も内容も聴覚に関わる表現技法と視覚に関わる表現技法とに区分されてきた。

さて、約30年前から通信メディアと記録技術が急速に発達し、テレビジョンをはじめとする視聴覚（聴覚情報と視覚情報をミックスした）メディアの進歩に伴って、音楽と美術の表現方法の統合が一般的なものとなってきた。

高度情報化社会と言われる今日、生徒の身の回りには様々な形の情報が溢れているが、中でもテレビジョンをはじめとする視聴覚メディアは、我々にとって情報提供あるいは入手の中心手段となっており、ビデオなどの普及により個人の表現の手法としても定着してきつつある。そしてここに至って音楽と美術がひとつの表現として融合・一体化したような作品も次々と生み出されるようになった。現代音楽や現代美術でも新しいメディアがどんどん取り入れられ、従来の領域区分や表現の枠にとらわれない作品が次々と生み出されるようになってきた。ナム・ジュン・パイクといったビデオ作家が生徒にとって周知のアーティストとなり、ミュージックビデオなど音楽と心象的な映像表現が混然となった作品を日常生活でも目にするようになってきた。

今後はコンピュータとインターネット関連によるマルチメディア環境が、広く社会に普及していくであろう。マルチメディア環境とは、文章表現と聴覚表現、視覚表現を混在させてひとつの表現として扱える環境のことを指している。このマルチメディア環境は過去の視聴覚メディアと違い、パーソナル・コンピュータを通して個人に幅広い表現の機会と可能性を与えるものである。

このような今日の表現の多様性と多義性を考えるとき、従来の領域区分や学習内容・指導法だけでは不十分になってきている。一方では表現の基幹を支える基本的な表現活動も大切である。しかし現在の文化のボーダーレスな部分を考えると、それらをどう享受していくかは大きな課題であり、子供達の感性の許容力や包括力を高めるためには、ある面では未熟で中途半端な表現であっても様々な試みに満ちた活動を展開で

きる学習時間を積極的に保証して行くべきであると考えられる。

(2) イメージを深める。

以上のような事柄を踏まえて我々は音楽科と美術科を統合した学習領域にアプローチすることを考えた。音楽科と美術科は同じ表現活動を扱う教科として、子供達の心情面を陶冶する上で相互に補完的な役割を持っていると考える。そこで今回は、音楽と美術がそれぞれに他の領域の表現を付け足すというのではなく、新たに、音楽的表現と美術的表現が一体となって補完的に働く表現領域を意識した内容を合科的学習として創作してはどうかと考えた。

音楽であれ美術であれ、その表現の根幹となっているのは、その人のイメージ世界であろう。このイメージ世界を豊かにすること、あるいは自分のイメージ世界を深く掘り下げていくことがより豊かな個性的な表現につながると考える。ある一つの表現主題に対して音楽と美術の双方からイメージを突き詰めて行くことにより、その主体者は厳しく自らのイメージとその表現に対峙することになり、またより広がりのあるイメージを手に入れることになるだろう。

(3) 表現の多様性、多義性を求める。

例えば音楽科と美術科で、同一の学習材(単元)を双方の教科で同時に扱う。音楽と美術が融合することにより非常に多義的なイメージと表現の場がそこに生じると考えている。その場で生徒は、一人一人が様々な選択・判断の場面に立たされることが想像できる。その際、それぞれの教科担当教師が自分の持ち味を生かして指導に当たることが大切であろう。音楽教師が音楽の専門的な立場から、美術の教師が美術の専門的な立場から意見を提示する・・・もちろんそれは収束的な発想ではなく、ひとつの表現主題や課題に対する多角的なアプローチや多様な展開が可能になるような意見。これにより生徒の求めるイメージに対応する能力も高まるだろう。時には混乱も生じるだろうが、試行錯誤も以上のようなねらいからすれば重要な活動である。

このような活動を通して音楽と美術、双方の表現の特性が明らかになるだろう。そして、音楽と美術の融合的なボーダーレスなイメージと表現が生み出される一方で、どちらか一方に偏った表現も出てくるだろう。生徒一人一人の適性に応じた表現の仕方を引き出すことが可能になればと考える。

(4) 表現の時間を確保する

また、音楽科の学習と美術科の学習を統合的に行うということには別なメリットもある。現在中学校では、教育課程に関わる年間総時間数の削減に伴い、各教科の割り当て時間数の見直しと学習内容の精選が行われている。音楽科、美術科においても従来の時間数の維持は難しく、それはとりもなおさず表現学習に子供たちが関わる時間の削減にもつながってくることである。表現のための時間を十分に確保することによって、自分の表現意図や内容についての吟味を十分に行わせることが可能となるだろう。週当たり1時間と2時間とでは取り組みの態度や学習の深まりの度合いがかなり違って来るだろう。

(音楽)

従来の音楽科の授業の中で美術科の領域との関わりがあると思われる事柄をあげてみると、そのほとんどが鑑賞領域において行われてきた。

音楽と絵画とのつながりには深い関係がある。たとえばハウプトマンの絵をみたムソルグスキーがその印象を作品にした「展覧会の絵」や日本の浮世絵に強く影響されたと言われているドビュッシーの音楽などが有名であろう。

印象派の音楽としてドビュッシーやラベルの作品の鑑賞の授業を行うとき、葛飾北斎やモネの作品との関連について学習し、絵画から受ける印象と音楽から感じ取られる印象との関連を探らせることを行ってきた。また、総合芸術としてのオペラの鑑賞において、舞台美術との関連について取り上げることも行ってきた。

しかし、これは美術科の領域を絵画や造形物としてとらえているものであり、本来美術科の領域の中には静止画だけではなく動画（映像）も含まれている。

音楽表現活動においてイメージづくりは重要な事柄である。そして、イメージと映像は切っても切り離すことができない。

歌曲には情景を歌ったものが多くあり、その情景を頭の中に描くことでより豊かな表現をすることができる。「赤とんぼ」では夕焼けの映像、「花の街」では、幻想的な世界と焼け野原と化した世界の映像があり、「花」においては桜の映像がある。

例えば、「荒城の月」の中で歌われている「月」は満月なのか三日月なのか、また、くっきりと見えている月なのか、朧月なのかで表現は全く違ったものになってしまうはずである。さらに流れ行く雲で月が見え隠れしているとなるとどうであろうか。

「情景を思い浮かべて歌う」といっても、どのような情景を思い浮かべているのかを理解することは難しい。また、生徒の体験及び経験がイメージ創りに大きく左右してくるのである。

そこで今回の学習は、イメージをより具体的な映像として描き出すことで創造力の向上をめざし、豊かなイメージ創りを行うことで、音楽的表現力を高めることと伝達力の向上をめざすことを試みた。

「イメージを結びつけて表現するー音楽・映像の創作ー」と題した学習材である。これまでの授業では鑑賞領域だけで具体的な映像（絵画等）をあつかってきたが、音楽科、美術科としての扱いではなく、表現の学習として2教科間で行った。あくまでも中心は表現するということであり、そこに音楽的観点、美術的観点による支援を行っていくものである。したがって生徒は映像から音楽をイメージするものがおり、音楽から映像をイメージするものがあるわけで、その取り組みは自由に選択できるわけである。これはごく自然なことなのだが、音楽科で扱う、美術科で扱うとなるとこだわる場所である。

この授業の目的は、ビデオアートとしての作品を完成することにあるのではなく、自分の描くイメージにより近いものに映像を創ろうとすることや、音楽を選択創造することにこだわりをもって活動することにある。これを行うことで、表現することにおけるイメージの大切さや、日常なにげなくとらえていることに幅広く視点を置き豊かな感性を磨いていけたらと思うのである。

(美術)

今回の学習内容について述べる前にまず、従来の美術科の授業の中で音楽科の内容に関わりがあると思われる事柄をあげてみたい。

1 心情を表現する活動としてのつながり

絵画表現や彫刻表現は、心情を豊かに表す活動として音楽表現と深く関係している。例えば風景画を描くときにその情景にふさわしい音楽を考えたり、静物画や人物画を描く時に背景の図柄や色に音楽的な感性が働くことはよくあることだ。すると絵や彫刻に生き生きとした表情がにじみ出てくる。舞踏の場面など、音楽に携わる情景を描いた絵や彫刻では自然に音楽の楽しさや激しさが思い浮かんでくる。また現代美術にあっては作者自ら音楽との深い関わりを述べることもある。具体的な事物を描かない場合は心象的な色や形に抽象的な音のイメージが重なることは自然なことである。

2 構成的な造形物としてのつながり

デザイン領域において色と形による構成の学習を行うが、これは画面上の点や線・面(形)や色を構成要素として分解・分析して美的な構成について学ぶものである。この内容については、作曲における主題とその変奏に関する学習や対位法や管弦楽法との類似点が語られてきた。ポスターや工業製品、建築物に至るまで、その構成的な美しさは、ピアノ・ソナタや壮大な交響曲などに通じるものがある。

3 鑑賞領域とのつながり

音楽史と美術史を対応させて扱うことは、特に時代における人間性を理解する上で非常に重要であり、ここでも互いに連携・補完し合うものである。社会の動きや世相が美術作品や音楽作品には表われており、例えば印象派の絵画を鑑賞する際に印象派の音楽を聞けば、その時代の芸術文化だけでなく思想や社会背景について深く思索することに結びついていくであろうし、ひいては今を生きる生徒自身の社会との関わりを考えるきっかけになるだろう。

本校では、昨年度にも自分の心を癒す音楽との関わりを考え、その音楽のイメージを絵で表すという授業を行っている。自分の好みの音楽だけに生徒それぞれの心情の投影が行われ、単に音楽を聴かせて絵を描かせることとは違った深まりと個性の創出があったように思われる。

今回の授業はそれをさらに深めたものにしたいと考えている。「イメージを結びつけて表現するー音楽・映像の創作ー」と題した学習材である。これまでは描画された作品を音楽に合わせるかその逆、または音楽を聴いたイメージを描画するなど、殆ど静止画で扱ってきたが、今回は音楽と同様の時間軸を持った視覚的表現である映像を使い、音楽表現あるいは聴覚表現とのシンクロ・融合を図りたい。映像の持つ「動き」や「変化」の効果は非常に面白いものである(これは静止画や彫刻にも内在している)。日頃見落としていたちょっとした動きが音楽の力や音の効果を添えることにより劇的に変化する。その様を通して自分の日常に対する目を豊かな感性に結びつけ、イメージの世界を大きく膨らましてくれたらと思う。

2 学習指導案（平成9年度 附属山口中学校研究発表会要項より）

学習材について

(1) 生徒は自分らしさにこだわりを持ち、それを音や造形で表現しようとしている。

生徒はこれまでに音楽や美術の授業を通して、自分らしさを音楽や造形で表現することのおもしろさや楽しさを味わってきた。しかし一方で生活体験の不足から、想像力や発想力の面で苦勞する生徒も多い。

2年生の時に行った「ストレスと音楽（音楽科）」では生徒に自分のリラックスできる曲についてアンケートをとってみたが、その結果音楽の好みについて個々人が自分なりのこだわりを抱いており、そこに自分らしさを感じていることがわかった。また、「自分のCDジャケット制作（美術科）」の授業において生徒は音楽の曲想をもとにデザインを行ったが、同じ曲でも生徒によって表したいイメージが様々であり、そこに自分らしさを表現するときの本人の思い入れやこだわりが表れていた。

このことから生徒は、自分の「表現したいイメージ」について、表現内容や表現手法も含めて自分なりのこだわりを持ち、それを表現することによって自らの存在を確認し満足したいと考えていることがわかる。

(2) 音と映像のイメージを結びつけることで豊かな表現の場を得ることができる。

音楽による表現に色や形を感じたり造形作品に音を感じたりすることがあるが、人の内面のイメージ世界では音楽も美術も、そしてその他の表現方法も、互いに関わり合っているものと考えられる。

従来の学習では、音楽科は聴覚的な分野、美術科は視覚的な分野とそれぞれに分担して行ってきた。しかし今日、生徒の身近な生活環境では音楽と映像を結びつけて表現することの方が一般的になっており、いわゆるマルチメディアの手法で自分を積極的にアピールする人も増えてきている。生徒の想像力を豊かに広げ、表現力を高めるために、あえて音楽科教師と美術科教師のT・Tで授業を行い、音楽と映像を関連づけて考えさせたい。生徒は音楽と映像という幅を持たせた表現領域の中から、自分に合った手法で自分らしさを追究し、自分なりの表現へのこだわりを深めていくことができる。

(3) 自分の表現へのこだわりを深めさせるために、学習活動に選択の幅を持たせる。

音楽や映像と、どちらの手法が自分らしさを表すのに適しているか、あるいはどのような素材や機材を用いれば、自分のこだわっている部分の表現が可能になるのかを生徒に十分に考えさせたい。そこで指導に当たっては、音楽と美術の教師が自分の教科指導の特性を生かしながら、次の点に留意したい。

- ① 個人の必要に応じた取り組みができるように活動場所や時間に余裕を持たせる。
- ② 表現の可能性を広げるためにCDプレーヤーやビデオなど、十分な機材を準備する。
- ③ 個人的な表現活動を基本とするために、グループはできるだけ少人数とする。
- ④ アドバイスカードを使って生徒の状況を把握しながら教師が積極的に援助する。

学習計画について

- (1) 音楽と映像の関係をつかみ、自分のイメージを創る。
- (2) 音や映像の素材集めをし、試作する。
- (3) 音楽と映像のイメージを結びつけて組み立てる。
- (4) それぞれの作品を発表し合う。

本時の学習指導案

- (1) 主眼 自分のイメージにあった音や映像の素材を創作、あるいは既存のものを流用し、音楽と映像を結びつけた試みの作品を創る。
- (2) 授業の過程

学習内容および学習活動		教師の手だて	
<p>① 本時の活動計画を確認し、次の観点から活動する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・音や映像の素材探しを行う。 ・素材の創作を行う。 ・素材が揃ったら試みの作品を創る。 <p>② 自分たちの活動内容に合わせて、場所を移動する。</p>		<p>① 音楽室と工芸室で音づくり用・映像づくり用と活用できる機材を区別し、生徒の活動の内容で活動場所を割り振る。また、前時に与えられたアドバイスカードを配る。</p> <p>② それぞれのグループの活動内容に応じて個別にアドバイスをを行う。</p>	
		美術室	
音楽で表現しようとする生徒	音楽教師の手だて	美術で表現しようとする生徒	美術教師の手だて
<ul style="list-style-type: none"> ・素材集め 絵コンテ作成 ・CS作成 ・試作 ・その他 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の持っているイメージをよく把握し、それに適した素材の創り方や入手方法、扱い方についてアドバイスする。 ・音楽の展開の仕方や映像に適した音楽づくりについてアドバイスする。 ・機材の操作方法を理解させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・素材集め 絵コンテ作成 ・CG作成 ・映像編集 ・画像合成 ・アニメ制作 ・試作 ・その他 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の持っているイメージをよく把握し、それに適した素材の創り方や入手方法、扱い方についてアドバイスする。 ・映像の展開の仕方や音楽に適した映像づくりについてアドバイスする。 ・特殊効果を用いた映像づくりを援助する。 ・機材の操作方法を理解させる。
<p>③ 音楽室に集まり、次の観点からアドバイスカードに記入する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本時の成果 ・次時への課題 ・質問及び要望 		<p>③ アドバイスカードの内容を見てまわり次の観点で評価を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分のイメージに合った素材を抽出することができたか。 	

3 実践を通して（反省と考察 および今後の課題）

（音楽）

実践への取り組みは次のような内容である。

（1）音楽と映像の関係をつかみ、自分のイメージを創る。

各種の音楽を聴いて思い浮かぶ情景や心情を発表し合うことで、多様な表現と共通な表現に視点を向けさせてみた。また、今度は逆に例題の映像を視聴しその情景をより効果的に伝える音楽を探してみることを行ってみた。使用する音楽によってその映像が伝える心情が大きく異なることに気づかせてみた。まずは身の回りにある音楽と映像の関係に目を向けさせ、その模倣から自分のイメージを創り上げていく方法をとった。生徒のイメージ創りにはかなりの個人差があるので、1人から4人までのグループ分けを自分たちで行わせた。

（2）音や映像の素材集めをし、試作する。

まず、自分たちがどんなものを行ってみたいのかを話し合わせ、大まかな主題が決まったところで、思い浮かんだイメージに合う音の素材集めを行わせた。まずは既製の音楽を視聴し自分たちのイメージにより近いものを探させてみた。音楽にこだわらず、音としての素材集めも行わせてみた。中には映像に合わせ即興演奏を行いたいというグループや、自分たちの演奏したものを使いたいというグループも現れ、そのこだわりを大切にさせた。音の素材集めにはMD、CDプレーヤー及びマルチトラックレコーダーを使用した。

（3）音楽と映像のイメージを結びつけて組み立てる。

試作を繰り返して出来た映像と音楽をあわせてみる作業では、使用時間のレイアウトを考えなければならない。この学習の中で自分たちの表現したいことへのこだわりを出す一番の活動なのだが、編集機器の数が十分でないため未完成で終わってしまうグループもあった。

（4）それぞれの作品を発表し合う。

互いの作品を鑑賞し合うことで多様な表現の工夫に気づかせることができた。

作品が未完成であった生徒もその過程の中で実際に自分たちが工夫を重ねているため、他のグループの工夫に気づくことが出来た。さらに描こうとしたイメージとその工夫の意図をレポートにまとめることで映像と音楽の関係について整理させてみた。

反省と今後の課題

イメージを持つということを漠然としたものから具体的なものにするには、もう少し段階を踏むべきだと考える。これだけの映像社会にあってもまだまだ与えられている側、つまり受け身的存在にあるため、技術的なことも含めて作成するまでの準備段階にかなりの時間を要した。しかし、音楽から浮かぶイメージを具体的な映像にしていくことで音楽的表現力が深まりだしていることは確かである。それは、この学習のつながりで行った合唱の学習において、生徒が歌詞の内容を検討し、常にイメージをもった表現を行おうと心がけていることや、そのイメージをより具体的な映像としてとらえ心情を表現しようとしていることから伺える。今後の課題として機器の充実を始め音楽材への関心を深める工夫が問われる。

(美術)

実践への取り組みは次のような内容である。

(1) 音楽と映像の関係をつかみ、自分のイメージを創る。

ビデオアート作品などの参考となる作品を鑑賞させ、また教師自身の試作を見させ映像表現の可能性を知らせるとともに、自分の主題について考えさせた。主題についてはまず自由で豊かな発想を大切にさせたいので、多くの作品を鑑賞させず、グループ活動により制作への取りかかりをゼロから探させた。またアイデアの段階で絵コンテなどを制作させ、いくつかの可能性から取捨選択させた。

(2) 音や映像の素材集めをし、試作する。

目指す映像の大まかな主題が決まったところで素材集めにかかる。素材は家庭用ビデオで撮影したものやマスメディアで放映されたもの(録画)あるいは自分で創作できないものであればそれに近い既成のものでも良い、または写真や描画された静止画で構成されてもよいとした。これらを一度おおまかにつなぎ合わせて試作品を作らせてみる。様々な試行錯誤から自分のイメージを掘り下げていくところである。

(3) 音楽と映像のイメージを結びつけて組み立てる。

試作をして気に入ったものを完成品として仕上げる作業。最初の計画から大きく変わってしまう生徒、あるいは未完成に終わる者もいたが、自分の追求したいイメージが確実に膨らんだり掘り下げられたりしているかどうかを評価の観点とした。

(4) それぞれの作品を発表し合う。

互いの作品を鑑賞し合うことで、表現主題に対して様々な表現の仕方(表現の多様性と多義性)があることを認識させたいと考えた。完成できなかった生徒に対しても自分の思いを述べさせ、追求しているイメージについて積極的な評価を行った。

反省と今後の課題

今回の授業だけでは完成に至る生徒が少なく、表現の上でも十分な深まりを得ることができなかった生徒も多かった。生徒達は本題材に対して意欲が低かったわけではない。また、この学習の効果は単にこの単元に留まらず様々な波及効果を生み出すものとは思っている。が、表現の多様性・多義性に対してとりつく方法を具体的に持っていなかった生徒にとっては一気に大きな負担をかけたとも考えられる。合科学習の可能性をより具体的にしていくために、今回の反省に立ち、今回は下のような改善策を考えている。

(1) 映像表現に関する基礎技術が身につけていなかったために、イメージはあってもどう取りかかっていいものかわからず逡巡する生徒が多かった。やはり機器の扱いに対する知識は必要である。

(2) 表現の多様性・多義性を理解するためにも、映像表現に関する様々な作品を鑑賞する機会を持つことは大切である。

(3) この学習の前段階に体育科との合科などで身体表現との結びつきで表現を考えさせ、同時に映像を扱って映像表現に対するリテラシーを培っておくことを考えている。

(4) 一方で生徒は予想以上にレベルの高い映像をつくらうとして挫折することもある。編集用の機器やCGを扱うためのコンピュータを使えるようにしておきたい。

終わりに

今回の芸術教科における統合授業は生徒達自信の自発的な学習への取り組みが顕著に見られ、今後のさらなる展開が期待できるが、検討すべき課題も見られたように思う。特に、生徒達自身のオリジナルな作品を作ることが芸術教科の目的である、というように規定してしまうと、今回のような授業の場合、はたしてその目的に適合しているのか、ということやはり一度は考えてみなければなるまい。もち論、作品そのものではなく、生徒達のオリジナルな表現を期待する、ということならば表現の方法そのものからオリジナルなものを考え出さねば意味がないということにもなりかねないし、表現された内容もティーンエージャーの一般的な心情告白以上のものにはなり得ないであろう生徒達のものには何らの新しさはない、という厳しい意見もあろう。一般教育と専門家教育は質的にも方法論的にも違うものであり、同次元で論ずること自体に無理があるという見解にも、芸術教育という同一の範疇に含まれる以上、専門家と愛好家を区別する必要はないのではないかと、という相対立する意見にもそれなりの真実がある。特別に自分の芸術感や価値観を大切にしたい芸術関係教科の教員が統合実践を授業として行うに際して、その授業をどういう基本的な理念で行うか、ということや、統合実践を行う目的は何か、といった様々な問題を十分に、互いに納得するまで話し合い、意思疎通をしておく必要があるだろう。

日本の教育は明治以来百何十年かにわたって世の中の事象総てを細分化し、それを科学的に観察、分析し、知識として身につけるといふ点においては、確かに世界でも極めて高位のレベルに達する事ができた。これは多く言われるように、国家が近代化のプロセスを踏むときの常套的な手段であり、事実、そのようにして近代化したモデルを欧米列強の中に見出した日本にとって、文明開化と富国強兵は日本が他のアジア地域と同様な植民地と化さないための、殆ど唯一の取るべき道であったことは、一応認めねばなるまい。が、その路線は一応太平洋戦争の敗戦という結果によって清算されるべきであったが、戦後の日本が取った路線は高度成長経済を主として加工貿易と輸出によって達成しよう、とするものであり、それが形を変えた富国強兵であることは多くのリベラルな経済学者、社会学者の指摘する所である。その路線は、東南アジアをはじめとする多くの開発途上国が日本と同じ道を後から歩み始めた時に翳りが見え始めたことは誰も否定できまい。また、1990年代始めに日本で起こった経済上の「バブルの崩壊」は高度成長経済が紛れもなく行き詰まりを見せ、その対処に必ずしも成功しなかった結果だ、と判断する人は決して少なくない。つまり、日本は今までのような輸出を主とする加工貿易立国では居られなくなった、ということである。現在、日本はその次の道として情報機器を主とする電子工業立国を目指し、ある程度それに成功しているようではあるが、これも「何か物を輸出して外貨、ドルを得て、その結果自分を、会社を、国を富ます。」という基本的な構図は何ら変わっていない。

生前の河野健次*は国際的な相互理解のための文化交流の必要性を、その具体的な方法としての日本からの文化輸出の可能性を講演などでしばしば述べていた。また、近年教育の場でも異文化理解の必要性が強調されているが、この異文化理解のみに限定されず、文化を広く深く理解するためや新たな文化を創出するためには総合的な知力が必要とされる。今回のこの試みは極めてささやかなものではあるが、新たなものの創出の可能性を細分化ではなく総合化の視点から実行したという点、日常的な文化の視点からの自分たちの可能性を探求した点で今後に寄与する物が大きいであろう。ブルーノ・タウトやピエール・ロティの感傷にも似た失われようとする文化を滅ぼさずに後世のために保存・継承する心情

を理解し、共感する態度も大切であるが、今は同時に新しい文化の創造も真剣に考えられねばならない。合科授業の試み、特に芸術系教科の統合実践授業が新たな文化創造の突破口の役目を果たしてくれることを期待したい。

なお、「はじめに」と「おわりに」は池上が、第1節から第3節まで、及び資料の音楽関係部分の中野が、美術関係部分が高下が担当した。

*前京都市立芸術大学学長・京都大学名誉教授、歴史学者。